チャイルド・アンド・チャイルド

刻城 雪兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チャイルド・アンド・チャイルド

【Ｎコード】
Ｎ２５１６Ｌ

【作者名】
刻城　雪兎

【あらすじ】
照れ屋で嘘吐きな彼と、
純情で猪突猛進な彼女が過ごす、
何時もの一時。

（前書き）

とても甘いかもしれません。バカップルはむかつくぜ！　って方は即バック。

麗らかな春の日差しが差す公園にて、ぼくは彼女と一緒にベンチに座りながら、キャッキャッと騒ぐ子供達を眺めていた。
「……子供達はなんであんなに無邪気なんだろうね？」
ぼくはコンビニで買った缶の紅茶を飲みつつ、隣に座る彼女に聞く。
「子供だからじゃない？」
答えにならない答えを返す彼女。……まあ、答えは期待してなかったから別に答えにならない答えでもいいんだけど。
そう思いながら紅茶をもう一口口に含む。
「ねえ」
この紅茶なかなか美味しいな、と思っていると、彼女が話しかけてきた。
「喉、乾いた」
いつもより素っ気ない口調で言う彼女。それを疑問に思いながらぼくは砂場を挟んだ向こう側にある自販機を指差し、返答する。
「あそこに自販機が有るよ。買ってくれれば？」
彼女はふるふると首を横に振る。
「……わたしが今飲みたいのはその紅茶」
ぼくは紅茶をまじまじと見る。この紅茶はこの辺りではコンビニでしか売ってない物だ。かといって先程寄ったコンビニに行かせるのも酷な話だ。
……つまり結論は。
「……はい」
ぼくは彼女に紅茶を渡す。
「……ん」
彼女は両手で缶を持ち、紅茶を飲む。
ぼくはそれを見てある事を思い出す。

缶だから飲み口は当然一つしか無い。
そしてぼくは先程その紅茶を飲んでいた。
……つまり。
間接的に今、ぼくの唇と彼女の唇は触れあっている。
顔が赤くなる。
彼女はそれに気付いてないのか平然とした顔で紅茶を飲み干し、ぼくに問う。
「ね、次どこに行く？」
「……えっと。……そうだね」
ぼくは平静を装って言う。
「本屋なんかどうかな。面白そうな本が見つかるかもしれないよ」
「本……ね。……うん、面白そう。よし、善は急げって言うし、早く行こ」
「あ、うん」
飲み干した紅茶の缶をベンチの隣のゴミ箱に入れ、彼女は立ち上がる。ぼくも返答し、立つ。
歩き始めた瞬間、彼女は言った。
「――ごちそうさま」
ぼくは思わず彼女を見る。
彼女は少し顔を赤らめて、「えへへ」、と　悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべた。
それにより、ぼくは彼女は気付いてたのだと気付く。
ぼくは顔を赤らめ、口をもごもごと動かす。
彼女はそんなぼくを見て、より一層笑い、走り出した。
……えっと、その、なんだろう。結局の所ぼくも彼女もまだまだ子供だと言う事だ。
……まあ、そんな哲学みたいな事を言ってもぼくの頬の紅潮は収まらないみたいだけど。

（後書き）

五時五十五分に投稿出来なかった……！割とショック。
あと、子供の日ほぼ関係ねぇ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2516l/

チャイルド・アンド・チャイルド

2010年10月14日01時32分発行